

源氏物語論 — 幸福の形成 —

目加田さくを

(1)

人間にとって、幸福とは何であろうか。少なくともある人間にとって、どのような状態におかれた場合、「自分は今、幸福である」と自覚する、ないしは、後日、その時期は幸せであったと回想するであろうか。ただ一瞬、稲妻のように過ぎ去る「幸せ」のおもい、もあれば、又ある時期、人によつては、かなり長い期間、幸福感に浸る場合もあろう。又、生涯、いわゆる逆境にばかり住して、傍目には「幸せ」に背をむけて暮しているとも見える場合でも、その人間自身は、悪条件を克服しつづけながら、ある時ふつと自己の生命力に満足を覚え、内心会心の笑をもらす、「じつに自分は幸せだ」と悟っている仁もあろう。近代となつては、幸福の実感は、従つて、幸福の定義は複雑多岐であらう。ある意味では古代的な、極く普通の幸福の条件というものについてひとまず考えてみる事にしよう。

ショーペン・ハウエルは「幸福について」(角川文庫本)の中で、「いずれは死ぬにきまつている人間の運命における差異を三つ

の基礎的規定のうえにおく」として、

(一) 人が在るもの。すなわち最も広い意味での人格、したがってこのうちにはその人の健康・力量・美貌・気質・道徳的性格・知能および教養が含まれる。

(二) 人が持つもの。すなわち普通の意味における財貨と所有物。

(三) 人が表象するもの。この表現を用いて人が他人の表象のうちにおいて在る物、つまり、もともと人はどんなふうにも他人から思われていくかということ……、人に関する他人の意想(思い方)のうち成り立ち、名誉と位階と名声とに分けられる。

をあげ、その差異が、人間の幸、不幸に対し影響するものであるとしている。

この中に、特に男性にとつては、重要なものが欠落している。それは、(二)に属せしめてもよろしかろう。「権力・政権」であり、男性・女性ともに重大な(三)に入れられる「恋愛・愛情」である。

後述する様に、『古代』男性にあつては「女」は(二)に属していた。源氏物語世界の開幕時において、(一)は、古代物語的完璧な美

貌、才能、性格、健康、教養等々が光源氏に賦与されている。その点、先ず第一に、人があるもの、ある態様という要件では、完全に幸福な状況下に設定されているのである。更に、(一)の人が表象するもの人のおもわくによっても、万人に貴ばれる天皇の皇子、(二)の財貨と権力によっても、世人の憧憬を一身に集めている有能な光源氏が辿る生の軌跡にあつて、果して彼が幸福の時期をもつことが出来たか。その幸福の時ありとせば、それはいか様に造型されているか、をみようというのである。

(II)

桐壺

出生、母の死、祖母の死、元服、結婚、藤壺入内、藤壺への思慕が物語られる。この巻は、前半は桐壺帝の亡き更衣に対する悲恋の叙情が主題となつている。長恨歌を背景にもち、長恨歌の世界――

(玄宗・楊貴妃の悲恋の世界)――と相映発しあつて、物悲しく美しい幻想的美の世界を創り出す。長恨歌は漢皇(玄宗)が亡き楊貴妃の魂の棲処を道士にもとめさせ、蓬萊宮中に眠るその夢魂をめざめさせ、便りを届け、かたみの髪挿をえて帰る神韻漂渺たる夢幻の世界であるが、それを海を越えた日本国・蓬萊の島にも擬せられた事もある東海の島国において、長恨歌への耽溺によって再現する。桐壺帝は同更衣の里方に道士ならぬ命婦を使に訪れさせ、御髪上の調度をかづけられたのを見て「亡き人の住処たづねいでありけん徴の釵ならましかば」と、長恨歌の世界を自分達の上に再形成する。

思しやりつゝ燈火を挑げつくして起きおはします

といった夜の世界の物思である。

後半は、美貌と才能で光り輝く源氏が元服と同時に結婚した少年から青年期に、理想の女性を義母の後藤壺に見出して懊悩しそめる、新婚に酔う事が出来ずに、かえつてうらぶれた気持で「かかる所に思ふやうならむ人をすゑてすまばやとのみ歎かしう思し渡る」まだ深刻ではないが歎かしい、みたされぬ物思の巻である。

帯木

前半はいわゆる雨夜の品定めで、若い人々が、口々勝手に女性の月旦をやる、一見いかにも心楽しい一夕のようであるが、源氏は「打眠りて詞交ぜたまわぬ」と、甚だ積極的ではない。実は内心、君は一人の御有様を心の中に思ひ続け給ふこれは足らず又差過ぎたる事なく物し給ひけるかなと有り難きにもいと胸塞がる藤壺への苦しい慕情にとり憑かれていたために心はれやらぬ境地であつたのである。

後半は空蟬との密通事件であるが、空蟬は家来筋の者の後妻であり、年輩者である。分別、情理かねそなえたインテリ女性で、決して美人ではない。再度の過失を拒否して姿をかくした。

帯木の心をしらで蘭原の道にあやなくまどひぬるかなと佗ぶる源氏は弟小君を傍に「臥せ給」うて「よし吾子だにな捨てそ」とくり言をいう、佗しい幕切れである。

空蟬

空蟬から再度の拒否にあう。所謂空蟬、もぬけの殻、「ぬぎすべしたりとみゆる薄衣」をもちかえる。誤つて軒端荻と契つたが、義母の空蟬とすべてに对照的で極めてありふれた娘にすぎなかつた。

拒否した空蟬も人妻という身分を辨えての拒否で

ありしながらの我が身ならばと取り返すものならねど忍び難ければ

源氏の文の端に

空蟬の羽に置く露の木隠れて忍び忍びにぬるゝ袖かな

とかきつける。双方共に歎かしい日々を送る、これ亦、恋があらながら佗しい巻である。

夕顔

源氏にとって終生忘れ得なかつたタイプの女性夕顔との出会い、逢瀬、その急死、までが一巻にまとめられている。親友の失踪した愛人かと疑いながら、その容姿、人柄に惹かれて、恋のよろこびに浸るまもなく急死にあう。立冬の日、かの空蟬も夫に伴われて任国に下向する。

過ぎにしも今日別るゝも二道に行く方知らぬ秋の暮かな

愛する人との死別、生別で巻が終る、悲愁で終る。

若紫

瘡病の治療に北山の聖を訪ね、若君（後の紫の上）発見という、まことに愛の希望に溢れた序章であるが、それも宿命の人藤壺の姪である。更にはじめて藤壺との不倫のシーンが設けられる。不倫の恋の悦楽に酔いしれる姿はない。実は既に犯していた事となつてゐる第一回の不倫に懊惱する藤壺は再度の過失に

世語に人や伝へむ類なく憂き身を醒めぬ夢になしても

と「思ほし乱」れるのであり、源氏にとつても、「などか斜なる事だに打交り給はざりけむと辛うさへぞ思さるゝ」辛い恋の逢瀬であ

る。更にその結果は、「浅ましき御宿世の程心憂し」、てき面、罪の子懐妊となつて、藤壺を「空恐ろしう物を思ほす事隙なし」という境涯におとしられる、最も「空恐ろしい巻」である。それとないまぜに、最もよろこびに溢れた事件——この巻の主テーマ、紫の上を二条院へ引きとる次第——が展開される。実は源氏にとつて理想の女性である紫上との出あいの巻であるから一点の曇りもなく光明に輝き、祝福される巻として設定されてしかるべきであつた。ところがそれは設定しなかつた。深刻な罪の恋が、藤壺との間に犯される現場が生々しく、重くるしく描き出される暗黒の面と、天上の藤壺に対し地上の藤壺とも言ふべき紫の上との結びつき、清純な悦び、光明祝福にかがやく面とが、表裏となつて、光りと影、祝と罪との混沌とした相貌がこの巻である。無邪気な若君を引きとる源氏の姿をほほえんで見守つていられない読者である。源氏を待ちうける報い、罪の恐ろしさを予見し、危惧、不安、憂にかられる巻。

末摘花

夕顔の死後、わかんどおりのおちぶれた姫と契つたが、それは異様な鼻の持主であり、時代遅れの教養と見識に凝り固つた人である。源氏は我と我から漁色の失敗、苦笑を招いただけである。唯いささかの救は、あどけない少女との会話と、末摘花を戯画化する事である。

紅葉の賀

朱雀院行幸に先立ち、藤壺の前で試楽があり、源氏は青海波を舞う。藤壺への不倫の恋がなければ、心楽しい晴の行事も心はみたされない。藤壺不倫の子出生。以来、藤壺には、事実露見の恐れが片

時も身をはなれず、不安に戦いて暮す事となる。「五十七八才」の「源典侍との戯れを頭中将におどされる漁色の失笑や、紫の上の初々しい姿に綻ぶ微笑が救いである。不倫の子は源氏に生き写しであり、母藤壺は不安のまま中宮となる、何とも後味のわるい巻である。

花宴

南殿の桜の宴、源氏は舞にも作文にも非凡の才能を示し、人々の讚歎を浴びるが、藤壺への思慕で心は晴れない。「藤壺辺を理無う忍びて窺ひありけど語らふべき戸口も鎖してければ……打歎きて猶あらじに弘徽殿の細殿に立ちよ」って、「三の口」が開いていたため侵入し、「朧月夜に似る物ぞなき」と打誦して来た姫をとらえて契を結んだが、後日、兄春宮に入内予定の六の君である事がわかる。又、共に許されぬ恋に歎くこととなる。

葵

北方葵上に一子夕霧の誕生。悦びも束の間、葵の上は側室六条御息所の生霊に苦しめられて死亡する。優雅典麗な貴婦人の生活は、実は陰惨極らない愛執の葛藤に一枚の薄衣を被せかけたにすぎない。美しく恐ろしい場面がつづく。ただ一縷の光明が終り近くさしてくる。それは紫上との新枕である。しかしながら、紫の上の面から考えるならば、地上における光明あふれた理想の女性紫の上との結ばれる時期が、傷ましい葵の上の死のあとまもなくである。紫の上の北方としての出発が、到底、全き幸福を予見出来そうにない設定のし方である。

賢木

桐壺院崩御——源氏の権力の衰亡を暗示する——にはじまる。主

テーマは、彼の生霊の主六条御息所が御女斎宮の下向に同行し、京を離れざるをえなくなる。秋の野宮を訪れた源氏との間には埋められぬ溝があり、味気ない未練の別れである。藤壺出家。左大臣の致仕。新帝になって源氏、左大臣系は今迄の権勢の坐を逐われ急激な衰運に追討をかけられるように、源氏朧月夜密通の露見。次に来る報復処罰の恐しさの予想で巻が終る。

花散里

巻頭の「人知れぬ御心づからの物思はしきは何時となき事なめれどとかく大方の世につけてさへ煩はしう思し乱るる事のみ増れば物心細く世の中なべて厭はしう思しなるるに」という心境が全巻を通して、その期間中の忍びあるき一二が語られるが、折角の逢瀬でありながら、その語らい等は全く叙せられない。「この頃残る事なく思し乱るる世の哀れのくきはひには思ひ出で給ふ」て訪れるといった甚だ地味な恋で、橘の花散る里を訪うとはいえ、全巻の雰囲気は気の重い沈んだものである。

須磨

須磨流謫をテーマとする。最も佗しい、光源氏には逆境、試練の時期である。

明石

謫居生活の佗しい明暮に一縷の花やいだ悦び、明石の君との結婚があるが、それはあくまで日蔭の恋であって、紫の上の恨みによって水をさされ、更に源氏の赦免によつて一頓坐をきたす。源氏は明石の君一家の歎きとはうらはらに、危うく深淵から這い上る事をえて、ほっと息をつく息。

澤 標

源氏や左大臣の政界復帰、冷泉帝即位へと政界を牛耳る態勢が着々と完成してゆく。明石姫誕生。美々しい源氏の住吉参詣に日蔭の人明石の君は詣であいながら遠慮しなければならぬ。明石に上京を促す源氏の便りがくる。人生の転期に立って希望と不安に明け暮れる明石一家。六条御息所の帰京と出家、つづいてその死。源氏にとっては公認の愛人であり、氣位高く、死後も怨霊となつて源氏の愛情生活を妨げる程愛執の念が最も強かつた人。以下抄略。

(III)

五十四帖を通観すると、光源氏五十二年（その後一年生存か）の生涯、又、三代目薫の十四才から二十八才に及ぶ十五年、計、源氏世界七十五年の歴史において、憂の影が殆どみられない幸福な時期は、巻にしては、初音、胡蝶、梅ヶ枝、藤裏葉の四巻、就中、梅ヶ枝が絶頂であり、藤裏葉で終る。次の若菜上は、六条院を襲う大いなる不幸の開幕である。では、この巻々にあつて、その幸福な時期はどの様に造型されているか、みてみよう。

初音は新春の朝、晴天の幕明けである。

年立ち返る朝の空の気色、名残なく曇らぬうららかなげさには数ならぬ垣根の中だに雪間の草若やかに色づきそめいつしかと気色だつ霞に木の芽もうちけぶり自ら人の心ものびらかにぞ見ゆるかしましていとど玉をしける御前は庭よりはじめ見所多く磨き増し給へる御方々の有様まねび立てむ言の葉足るまじくなむ

春の殿の御前取分きて梅の香も御簾の内の匂ひに吹き紛ひて生け

る仏の御国と覚ゆ流石に打解けて安らかに住みなし給へり

場所は当時の金殿玉楼とされる六条院。庭には梅の香が漂い、空薫き物のくゆる室内に呼応する。地上の極楽という設定。主人公は太政大臣で、富と権勢を一手におさめ、もとより健康。容姿、才能、学識超一流である。擁する妻妾は六条院内では春、夏、冬の御殿に、院外の二条院の東院に又控えている。数多くの家来が参集し、養女二人、実子長男は秀才であり長女は正妻の手許に育てられ、その生母は冬の殿に住んでいる。成長の暁には、入内させ、未来の后と計画しているので、出自卑しい生母で難をつけられない為の配慮である。その犠牲となる生母のさびしさが一点の汚点となるのを妨ぐ為に、その教養と美貌に惹かれて新春早々冬の殿に泊つた、「罪えがましき」への償いが働いている。それが春の殿には「生けやしと思すべかめる心の中」であるが、此処では、深刻な紫の上の悩みを形成しないのである。許容される「夜がれ」とする。後年の同じ院内にすむ女三宮の許に泊つた「夜がれ」がもたらした紫の上の悩みは、彼女に出家を決意させ、遂には衰亡から死へと導いてゆく絶望的なものであつた事、紫の上は女三宮を軽視したが明石の君には好敵手としての敬意をすら払つており、源氏はつねに紫の上の明石の君への嫉妬に氣を遣つていた筈である事を注目しておこう。正月早々、源氏の華やかな浮気はまだ若い源氏の幸せなのである。

かくのゝじる馬車の音をも物隔て、聞給ふ御方々は蓮の中の世界にまだ開けさらむ心地もかくやと心疚しげなりまして東の院に離れ給へる御方々は年月に添へてつれづれの数のみ増れど世の憂き目見えぬ山路に思ひ准へてつれなき人の御心をば何とかは見奉り

咎めむその外の心もなき事はたなければ行ひの方の人はその紛れなく勤め仮字の万づの草紙の学問心に入れ給はむ人は又その願ひに従ひ物まめやかにはかばかしき掟にも唯心の願ひに従ひたる住居なり

と、生活を保証されて、色恋ぬきの、のんびりした明け暮れである。ここをも源氏は「騒がしき日頃過して」訪ねる。不器量な末桶花をそれとなく擲擻したり、並々ならぬ執心であつた尼姿の空蟬をいたぶり、泣き出させたりするが、

覚束なき日数積る折々あれど心の中は怠らずなむ……と、どの愛人にも如才なく愛想をふりまく。

いづれをも程々につけて哀れと思したり……所につけ人の程につけつゝ遍く懐しくおはしませば唯かばかりの御心に懸りてなむ多くの人々年月を経ける

という、アフターサーヴィス、一面倒見のよきである。この様に、内廻り—(六条院内)、中廻り—(東院その他)、外廻り—(臘月夜、六条御息所といった高貴な愛人から時々通う身分低い名もなき女性達迄)と、多勢の女性にとりまかれ、憧れられてる男——極楽は九品蓮台の衆生にとりかこまれてる大悲者のように——。しかも「生ける仏の園」では、波風をたてて、適当に嫉妬されて生命の緊張感を味う、地上最高にもてる男性としての優越感に浸っている。古代的かつ、極めて普通の幸福な男の造型である。今年は「男踏歌」のある年で、「内裏より朱雀院に参りて次にこの院に参る」即ち、表面、階層上は、天皇・上皇に次いでの高貴な存在。天皇は実子、上皇は兄であり、第一の美貌、才能、学識、健康等々に抜群で

あり、第二の所有物、富、権力、女——古代的意味での——又比類がない。實質上は地上最高である。

道の程遠くて夜の明方になりにけり月の曇りなく澄み勝りて薄雪少し降れる庭のえならぬに殿上人なども物の上手多かる頃ほひにて笛の音いと面白く吹き立てて

と、夜を徹しての「あそび」がくりひろげられる。即ち、六条院という極楽の園は歌舞音曲をもって荘嚴されねばならないのである。

芸術——ここでは音楽——の世界に心おきなく陶醉する——光源氏の幸福を形づくる重要な要件である。しかも、単に、音楽を奏しつつ、聞きほれつつ浸る幸福感では十分ではないのである。子息夕霧の中将は内大臣家——(当代一流の音楽の才をもつ家系)——の子息達と共に、多勢の中でも一際目立つ存在である。父たる源氏は

中將の聲は辨の少將にをさをさ劣らざめるは怪しく有識ども生ひ出づべき頃ほひにこそあれいにしへの人は真に賢き方や勝れたる事も多かりけむ情だつ筋はこの頃の人にえしも勝らざりけむかし一、は、自分の子息夕霧と音楽の名門内大臣の子息少將とを対比し、競争意識をかきたてる。

二、古代——尚古思想の風靡する当時でありながら、その万づ尚しとする古代に対して競争する意識はかたい。古代は理性的・確実な技法はすぐれるが、現代は情感・余韻、ではすぐれている。芸術にとって重要な面においてはひけをとらぬ、というのである。源氏の意識には、常に対抗意識、ないしは、最高を狙う意識がある。自己(自己の子孫を含む)及びその延長としての現代を基盤として、青少年時代は、(自己(わかんどおり系も含む)及び左大臣系対右

大臣系、後年には、自己対内大臣系。又、「この頃」対「古」があり、それが相拮抗する、或は、勝る、という意識の支えの上に、光源氏の「生命の緊張感」——幸福感、脱古代的幸褔が造型されるのである。

胡蝶は「三月二十日余の頃ほひ」と、時は春、場所は六条院春の御殿である。人物は六条院の女主人公紫の上、春を好み源氏と共に春の殿にすむ「春の御方」、罪のかげりをいささかも有しない貴婦人が中心である。御前の池に竜頭鵜首の唐船をうかべ、唐風の装束をした美童に棹させ、女房達をのせて漕ぎめぐらせ、楽人を召しての遊宴である。翌日は秋の殿で行なわれる中宮の御読経に、源氏をはじめ天下の貴顕が袖を列ねる——「殿上人なども残りなくまる」という盛大な法会である。そこへ「春の上の御志に仏に花奉らせ給ふ」晴の「献花」の儀がくり展げられる。その目を疑う豪華典麗な優雅さは此の世のものとも思えぬ程である。

鳥蝶に装束き分けたる童べ八人容貌など殊に整へさせ給ひて鳥は銀の花瓶に桜を挿し、鬘には金の瓶に山吹を同じき花の房も厳しう世になき匂ひを尽くさせ給へり。南の御前の山際より漕ぎ出でて御前に出づる程風吹きて瓶の桜少し打散り紛ふいと麗かに晴れて霞の間より立ち出でたるはいと哀れに艶きて見ゆ童べども御階の下に寄りて花ども奉る行香の人々取次ぎて闕伽に加へさせ給ふ御消息殿の中將の君して聞え給へり

花園の胡蝶をさへや下草に秋まつ虫は疎く見るらむ

宮かの紅葉の御返りなりけりと微笑みて御覽す

紫の上は、このように凝った趣向——最高度の芸術美——でもつ

て、若く美しく高貴な秋好中宮の法会を、亡母六条御息所の怨念の噂に人知れず胸を傷める中宮のしめやかな仏会を、あとう限り華麗に形成しようとする。(1)鳥、蝶と異対の花使いに金、銀、桜、山吹とそれぞれ異対の花瓶、花をもたせて花を捧げさせる。

(2)秋好中宮が、かつて紫の上に挑んだ春秋優劣争いの挑戦の歌(少女巻)

心から春待つ園は我が宿の紅葉を風の伝にだにみよ
対し、当時、即妙に

風に散る紅葉は軽し春の色を岩根の松にかけてこそみめ

と応戦したが、源氏はそれを春秋争いの終着とは認めなかった。春秋の美は口先だけの言い争いで決定してはいけない。

源「此の紅葉の御消息いと妬げなめり春の花盛りにこの御答は聞え給へ此の頃紅葉を言ひくたさむは立田姫の思はむ事もあるを差退きて花の陰に立ち隠れてこそ強きことは出で来ぬ」

秋には秋の美を虚心に認め、退いて春を待ち、春の時期に相手方の心を動かさねば、真に春秋の美を解する者とはなりえないのである。翌年の春、待つていた紫の上が、「どうです、春の花園の此の胡蝶の可愛いらしいことは。これでも春はだめですか?」と逆襲する。それをうけて

胡蝶にも誘はれなまし心ありて八重山吹を隔てざりせば

と応じ、中宮の御読経、しめやかな中にも華やかな舞台で、当時の最高の教養と美をそなえて、帝王の妃と臣下最高の太政大臣夫人とが交した春秋争いは大団円を迎える。それは優雅にして高尚な、伯来風な競技である。その争いをさせ、文化の先端をゆくは源氏で

ある。源氏は三十二才（薄雲）の巻で、

「はかばかしき方の望みはさるものにて年の内行き変る時々の花紅葉空の気色につけても心のゆく事もし侍りにしがな春の花の林秋の野の盛りをなむ昔よりとりどりに人争ひ侍りけるその頃の実にと心寄るばかり顯はなる定めこそ侍らざなれ唐土には春の花の錦に如くものなしと言ひ侍るめり大和言の葉には秋の衰れを取り立てて思へる何れも時々につけて見給ふるに目移りてえこそ花鳥の色をも辨へ侍らね狭き垣根の内なりともその折々の心見知るばかり春の花の木をも植ゑ渡し秋の草をも掘り移して徒らなる野辺の虫をも棲ませて人に御覽せさやむと思ひ給ふるを何方にか御心寄せ侍るべからむ」^B「女御の秋に心を寄せ給へりしも哀れに君の春の曙に心染め給へるも理にこそあれ時々につけたる木草の花に寄せても御心留まるばかりの遊びなどしてしがな」

と、春秋争いの遠大な構想をもったのである。四町の大邸宅を春夏秋冬の四ブロックにわかつて四季それぞれの景観の美を形づくったし、そこに適する貴婦人を住ませた。その中、六条院の基となつた六条御息所旧邸址にあたる秋の殿に住む遺児秋好中宮と、六条院の女主人、春の殿に住む紫の上との春秋争である。源氏は六条院での生活、人間としての自己の生活で最高の価値を、洗練された自然美と洗練されきつた人間美——容姿・教養——とのかかわりにおいで形成する。共に雪月花を静かに眺める、舟を浮べて楽しむ、といった形のみでは満足しなかつた。自然美の評価で争わせる相で、一層強化したのである。しめやかに秋の殿で御読経がつつげられる。花を奉る春の殿（養母）の挑戦をうける秋好中宮は、去秋、秋色濃い

庭を眺めながら詠み送った己が紅葉の歌を思いうかべ、微笑する。

それはとりもなおさず、源氏の微笑に外ならない。争という形での対立する美の調和であつて、源氏の狙つたものである。あくまで、調和でなくてはならない。春の美も秋の美も古来、教養人が軽忽に優劣をつけ得なかつた重要な課題であるから、後世の教養人源氏をはじめ諸々の教養人も、それは大切に考えねばならない、というわけである。それで、紫の上秋好中宮といった、人物上相拮抗する二人の貴婦人を配したのである。調和を予見した争、美についての美的な行動、最高の美的な争い、いささかの醜悪さ——憎しみ——をも交えない争、の形成である。静かな美でなく生々と動く美の享受であり、激しく迫る美の働きかけ——どちらが、どう出るか、への興味——に美を愛する源氏の心が躍動させられる——それが、源氏の願う「心の行く事」、満足感、幸福なのである。

源氏は、「はかばかしき方の望みはさるものにて」と先づことわらる。これは少し前で、

今はいかでのどやかに生ける世の限り思ふこと残さず後の世のつとめも心に任せてこもり居なむと思ひはべるをこの世の思ひ出でにしつべき節のはべらぬこそさすがに口惜しうはべりぬべけれ^A数ならぬ幼き人のはべる生ひ先いと待ち遠なりやかたじけなくともなほこの門ひろげさせたまひてはべらずなりなむ後にもかずまへさせ給へ

秋好中宮に、源氏が子女の事を頼む条である。殊に明石姫の将来を後見してほしい、源氏一門の繁栄を計って下さいと明らかに頼みこむ。

即ち、源氏には、家内、子女を思う面が備わってきた。それは、伊勢物語、平仲物語といった歌物語の主人公たる、「在中」「平仲」は、あくまでも「二枚目」で通した。二人とも子孫があるのであるが、「昔男の世界」も「この男」の世界にも「子供」はちらりとも姿をみせない。つまり、「歌物語」の世界の主人公は、即、恋の主人公であるからである。源氏物語では、「在中」「平仲」以来の、歌物語系の恋の主人公たる一面は最後まで強い。恋の主人公が即源氏、即薫、ともいえるのであるが、光源氏は、二枚目で終らない。人の父親としての面が出てきている。夕霧に、明石姫に注ぐ愛情は、源氏物語が歌物語を超越した点の一つである。(後に、徹底的に二枚目の源氏が、養女秋好中宮、玉鬘に対して懐く愛の葛園が出てくるのであるが。)

c、は人間としてこの世を終るに際して、何の残す所もない、という感慨であるのか、例の色好の言、秋好に対する思慕なのか、不明であるが、一応文字通り解するならば、人間ないし、男子として何らこの社会にのこす事のない空しさ、——太政大臣であれば当然政治的にもなにかの貢献があるべきであるが、それもなし、彼の得意とする芸術の世界への貢献もない、うかうかと過して来た生涯をふり返っての悔、である。ABC中、基底には、一俗人として、平凡な人間として、当然最も関心のある子孫の政治的繁栄への配慮が出てきたのである。したがって、光源氏にとって、最も願わしいものの一方に恋があり他方に、極くありふれた男子の希求、政権と富、地位と名誉といったものがある。それは自己のそれらであり、愛する子孫のそれ、つまり自己を中心とする一門のそれである。自己は太政大臣で

あり、娘は皇后となり、子息は太政大臣となる。更に娘の皇后は帝王の母となる——この事は、当時女性として最高の地位を意味し、臣下として帝王の祖父という栄誉を意味すると同時に、その裏に、実利がある。将来迄も一門が外戚として政権を握りつづける保証である——。そのみではない。不倫の子は帝王となり、准太上天皇の待遇をうける。まあ、考えられるところで、最高、完璧の権勢を掌握した事となる。即ち、濡標の巻で「宿曜に御子三人、帝、后必ず並びて生まれ給ふべし中の劣りは太政大臣にて位を極むべしと勘へ申したり」という占いが、明石姫誕生、冷泉帝即位と実現の緒についてのをよろこび、后にもなるべき姫が明石の浜で生まれた事を「いとほしく辱くもあるべきかな」と早速、手許に迎える心用意をはじめ。以来、着々と后養育の計画をねり、実行するわけである。濡標の巻で御子三人の一人、冷泉帝は即位した。これは内密の親子であり、源氏が心の奥で悦ぶのみである。

梅ヶ枝は開巻劈頭、姫の「御裳着の事思し急ぐ御心掟世の常ないず春宮も同じ二月に御かうぶりの事あるべければやがて御参りも打続くべきにや」

この巻は、裳着の巻である——姫の裳着は単なる娘の成人式で終るのではない。その後直に、春宮への入内を控えている、実に前途洋々として幸福な晴の儀式、とことわる。従って裳着の式を控えて、準備に忙殺される華やいだ六条院が舞台となる。裳着の式に用いる香の調合に、源氏みづから鉄臼の音をたてる。当時一流の教養人に、調合の依頼である。秘伝を勘考し尽して調製された香がそれぞれ届けられる。その随一は前斎院の梅の散りすぎた枝に御文をそ

えて沈の箱にるりのつき——紺の杯に五葉、白い杯には白梅の心葉がつけられて——に納めて贈られる。六条院の貴婦人方の香もあわせて聞香の香合が催され判者は兵部卿官である。その優劣を

「春、梅花は紫の上」「夏、荷葉は花散里」「秋、侍従は源氏」

「冬、黒方は齋院」「季外、薰衣香は明石」

とそれぞれに花をもたせた裁定で、めでたしめでたしである。折から月さし出で、大御酒など参りて音楽会となる。

御子の一人、后がねの明石姫の裳着が、主行事としてクローズアップされているこの巻の間、かたや、源氏の執拗な欲求、恋の情念は、不思議に鳴りをひそめているのである。叶わぬ恋の相手、前齋院にも、香の注文のみですんなりと終る。兵部卿官に冷かされながら、唯心の波立ちがあるだけで、苦しみはない。愛娘の裳着や入内の支度に正面きって取り組んで余念がないものの如くである。裳着の支度を彩るもの、香合や書合——芸術上最高水準を競う競技である。それぞれ当代一流の人々に最高の作品を制作させて挑ましめる。誰が勝つか、どの様な逸品が出現するか。生命の緊張と、螢兵部卿によってそれぞれにランクづけられ、一同讚歎の中——つまり調和の中——に幕が下りる。それは、書は源氏に及ぶ者なく、香はそれぞれ制作者めいめいの逸品が個性的ですぐれていた。源氏も黒方に軍配をあげて貰う——最高の芸術をめざして競争、あい挑む、「生命の緊張感と、勝利をえた「優越感」、あい共に認められた「調和・平和の意識」が、愛娘の祝儀の場——父親としての古代的、人間本来の幸福感あふれる——で一層複雑な喜び、希望にあふれた満足感となっているのである。

裳着の式が中宮の御腰結によって盛大にとり行なわれる。一点の暗さ

母君のかかる折だにえ見奉らぬをいみじと思へりしも心苦しうて参らやせましと思せど人の物言ひをつつみて過したまひつ

生母は受領の娘、と取り沙汰されては、皇后コースを辿るべき明石姫の疵となる、と思つて許さない。情、心を重んじる源氏にして、猶かつ存する俗物性の面である。今のさびしさは我慢しろ、娘が中宮となり国母となれば、晴れて対面の時もあるう。今は何よりも政敵共に露塵ほどの難をもつけさせてはならぬ。それ裳着だ、それ入内だと心がはやっている。四月入内と決定し、調度、衣類、書巻等々の調達に懸命である。冊子の箱に収めるべき冊子類は、そのまま習字の手本になるようにと、伝来の能筆の作品に加えて、源氏自身をはじめ天下の有名無名の手かきに、又、女流の名手朧月夜、前齋院、紫の上をはじめ、「世の中に手かくと覚えある上中下の人々に」依頼した。様式も葦手絵、歌絵、草体をも加えた。料紙も唐産、高麗産、本朝産の色紙がとりそろえられ、意匠を凝し、書体を案じたものばかりで優劣がつけ難い逸品揃いである。

娘の春宮入内は目前に——一安心。満足。子息夕霧にとって苦しい恋愛の凍結も、雪どけが目に見えて来た。許さなかった内大臣側が、夕霧求婚の噂に動揺をはじめ焦燥感にかられ出した。源氏、夕霧は平然と内大臣の折れて出るのを待っている、優勢な立場となったからである。

藤裏葉では源氏は准太上天皇となり、夕霧は、太政大臣の女雲井雁との恋が実つてめでたく結婚する。その一部始終が主テーマであ

る。卷末に、「神無月の二十日余りの程は六条院に行幸あり」と、源氏の不倫の子、冷泉帝が源氏の邸に幸する。兄の朱雀院も幸するので

世に珍らしく有り難き事にて世の人も心を驚かす主人の院方も御心を尽し目もあやなる御心設けをせさせ給ふ……その夜反橋渡殿には錦を敷き露なるべき所には軟障を引き厳しうしなさせ給へり東の池に船ども浮けて御厨子所の鶺鴒の長院の鶺鴒を召し並へて鶺鴒を下させ給へり小さき鶺鴒ども食ひ……

と善美を尽した歓迎の様である。冷泉帝は

御容貌いよいよ老成整り給ひてただ一つ物と見えさせ給ふを中納言の侍ひ給ふが異事ならぬこそめざましかめれあてにめでたき気はひや思ひなしに劣り勝らむ鮮やかに匂はしき所は添ひてさへ見ゆ

源氏に瓜二つ、劣らず立派な夕霧が、実は兄弟である。立派な子息二人——天皇と若冠十八才で既に中納言——を前に、主人は最高の地位、准太上天皇——天皇をある意味で超える存在——として安らかに振舞い、帝、院を豪華に饗応する。一人娘は春宮妃である。

地位、権力、富等々の上からみる時、それは全き幸福の日々である。ところが、それは、源氏の執念き色好みの性、が働かぬ時期、心づからの恋に悩む例の悪い癖が頭を上げぬ期間であったからである。——娘の裳着、入内に一所懸命な時期——政治的配慮、権力の持続、固持、と一人娘への愛執、その出世を希求する心、両者が入りまじって、その支度に熱中した——であった。色恋よりも先づ権力、といった俗物性、娘への本能的な父の愛が、流石の好色の性をぐっと抑えつけていた時期の、幸福感である。

(IV)

さて、源氏物語中に使われている幸の語の用例に当たってみよう

幸 (十七例)

- ① 宮仕にいで立ちて思ひかけぬ幸取り出づる例ども多かりかし 帚
- ② 継母の北の方などの世に俄なりしさいはひのあわただしさ 須
- ③ あはれに深く契り給へるは只かばかりをさいはひにてもなどかやまざらむとまでぞ見ゆめれど…… 明
- ④ 才学というもの世にいとおもくするものなればにやあらむいたう進みぬる人の命幸と並びぬるはいと難きものになむ 絵
- ⑤ 親たちもかかる御むかひにのぼる幸は年頃寝てもさめても願ひわたりし志のかなふといと嬉しけれど 松
- ⑥ 幸に打添へてなほ怪しうめでたかりける人なりや老いの世に持給へらぬ女子をまうけさせ奉りて身に添えてもやつしるたらずやらとなきに譲れる心おきて事もなかるべき人なりとぞ聞き侍る少 玉
- ⑦ いかがはかく宣ふをいと幸ありと思ふ給ふるを宿世拙き人にや侍らむ 玉
- ⑧ おとどの君の尋ね奉らむの御志深かんめるに知らせ奉りて幸あらせ奉り給へ 玉
- ⑨ 思ひなしにやなほこよなきに幸のあるとなきと隔てあるべきわざかな 玉
- ⑩ 皆酔ひになりておのおのかうさいはひ人に勝れ給へる御有様を物語にしたり 行
- ⑪ あり経てこよなき幸あり目やすき事になる折は斯くてもあしかな 行

らざりけりと見ゆれど

若上

⑫ おきて広きうつはものにはさいはひもそれに従ひせばき心ある人はさるべきにて

若下

⑬ 世の中にさいはひありめでたき人もあいなう大方の世にそねまれよきにつけても心の限りおごりて人のため苦しき人もあるを怪しきまですずろなる人にもうけられはかなくし出で給う事も何事につけても世にほめられ心にくく折節につけつうらうじくありがたかりし人の御心ばへなりかし

御

⑭ 限りなきさいはひなくて宮仕の筋は思ひ寄るまじきわざなりけり

竹

⑮ かばかり物々しくかしづきすゑ給ひて心苦しき方おろかならず思したるをぞさいはひおはしけると聞ゆる

寄

⑯ これかの御為にもながしか女の童の為にもさいはひとあるべき事にやとも知らず

東

⑰ 昔も今も物念じしてのどかなる人こそさいはひは見果て給ふなれ

幸人（七例）

⑱ 若君の御乳母たちさらぬ人々も年頃の程まで散らざりけるは皆さるべき事に触れつつよすがつけむ事をおぼしおきつるにさいはひ人多くなりぬべし

濡

⑲ 春宮の御元服只今の事になりぬるをと人知れず思ひ給へ心ざしたるをかういふ幸人の腹の后がねこそ又おひすがひぬれ

少

⑳ 世のことぐさにて明石の尼君とぞ幸人にいひける

若下

㉑ 斯く亡せ給ひにけりといふこと世の中に満ちて御とぶらひに聞え給ふ人々あるを……「いとみじき事にもあるかな生けるかひあ

りつる幸人の光失ふ日にて雨はそぼふるなりけり」

若上

㉒ 「二心おはしますはつらけれどそれもことわりなればなほわが御前をばさいはひ人とこそは申さめ斯かる御有様にまじらひ給ふべくもあらざりしとしごろの御すまひ又又帰りなまほしげに思して宣はするこそいと心憂けれ」

宿

㉓ 宮のうへのかくさいはひ人と世に申すなれど物思はしげに思したるを見ればいかにもいかに二心なからむ人のみこそめやすく頼もしきことにはあらめわが身にも知りなき故宮の御ありさまはいとなきけなきしくめでたくをかくおはせしかど人かずにも思さざりしかばいかばかりかは心憂くつらかりしこのいというかひなくなさけなくさまあしき人なれどひたおもむきに二心なきを見れば心やすくて年頃をも過ぐしつるなり、折節の心ばへのかやうに愛敬なく用意なきことこそ憎けれ歎かしく怨めしきしともなかくたみにうちいさかひても心にあはぬ事をばあきらめつ上達部親王たちにてみやびかに心恥かしき人の御あたりといふともわが数ならではかひあらじ

東

㉔ いかなるさいはひ人のさすがに心細くて居給へるならむ……

浮

㉕ ①は御子を生み——更衣などになる、という思わぬ出世、玉の輿に乗る意味であり、②は後見人の母・祖母をなくした逆境の姫が高名の源氏の正室におさまったという、玉輿を意味する。③も明石の新発意の娘が源氏と契るといふ好運。④は一般的に幸福で、権力・名声・地位がその主軸であろう。⑤源氏から側室として迎えられるという好運、玉の輿、とある。⑥も同じく、源氏と結ばれ、女子をあげたという好運を意味する。⑦は良縁、幸運の意。⑧幸運、六条

院に引きとられ、その後見をえて上流階級の姫となれる事を意味する。⑨は幸運——恵まれた生活環境を意味する。⑩最高の階層の女性でありすぐれた子息達・娘婿をもつ事、太政大臣未亡人で、大臣を子にもつ、出自又最高の皇女という。⑪幸せな結婚を意味する。⑫は一時的幸運、ここでは長寿も含まれる。⑬⑭一時的幸運。⑮第三皇子から正室待遇をうける玉輿の意。⑯良縁の意。⑰結婚の幸せの意。その大半は、斜陽族の女が玉の輿に乗った事に多く用いられている。玉の輿とは、現在、地位、権勢にすぐれている門流に嫁した意味である。

幸人の方は

- ① 思わぬ任官出世が出来た人の意
- ② 玉の輿にのり姫を生むという幸運の女性の意
- ③ 娘は准太上天皇の側室に、孫は女御に、ひ孫に男皇子誕生——帝となる予見あり——、その女は、六条院冬の殿で何不自由なく暮らす幸運

④ 源氏の北方——一代の権勢家の正室で多くの愛人の中でも愛されている——玉の輿にのった女性

⑤⑥ 匂宮の正室となった——玉の輿

⑦ 薫の愛人としてかこわれている——玉の輿。幸人の方も、貴顕の北方、又は愛人としてその愛をうけている、というので、世人は「さいはひ人」と名づける。或は、その女が、貴顕の愛人となり孫、ひ孫と高位、ないし権力の座にある、ないしそれを予想される、という場合である。上達部は外戚となり、権力をふるう為にその女を帝妃とし、上達部にあらざる者は上達部にその女を嫁せしめ度

いという根強い欲求、執念——つまり、権力、地位、富への願があったのであり、それを表現出来た場合は幸、人は幸人というわけである。——それは、あくまでも権力と富と地位を願う男性側からの幸福である。先づ、男性の側から、権力、富、地位の側から考えてゆこう。

(V)

源氏の俗物性

(A) 物質・権力・地位・名譽

梅ヶ枝をはじめ、初音、胡蝶、行幸、藤の裏葉等々の巻における、物質的な幸せ、その豪華な物と権力との提示は——（その芸術的高尚な趣味はしばらくおき）——一体何故であろうか。

一、世人及び作者の物質への強い執着、憧憬の反映である。作者即世人が「幸人」「幸」という場合、それは殆ど、玉の輿、権勢、地位、名譽、富にかかわるものであった。しめやかに純無垢の「二心なき」愛情をさす場合は皆無であった。この場合、即、その世人と共に讃歌する。——（批判をしない）——作者は、その権勢、地位、富、を有しない者達であり、憧れつづけて、いまだ入手出来ないでいる側の人々である。ここで憶いおこすべきは、宇津保物語における、物の羅列、物質への憧れ、権力の座への悲願である。貧寒な漢文芸作家圈の手になる宇津保物語が異常な迄に列挙する所以は、権力の埒外にしめ出されていた漢文芸作家圈の人々——つまり一般世人の代表でもある——のつきぬあこがれ、欲求の表われなのである。

(B) 女性——物としての——

臣下最高の官であつた太政大臣から、遂に准太上天皇——天皇とならない源氏の心中を付度した冷泉帝が、天皇に准じ、あるいは天皇を超える存在たる太上天皇に准ずる存在としてその実母藤壺と実父源氏に贈つた——となり、政權を一手に納め、並ぶ者のない權勢と巨万の富を貯え、四町にわたる豪壯な邸第を構えた。權力と富をもつ独裁者は古代社会にあつては、次に必ず、多勢の女を擁する。中国の皇帝が長恨歌で愛誦された「後宮佳麗三千人」を擁したように、日本の天皇も亦、多くの後宮をもつたし、貴族もその階層に應じて複数の「女」をもつていた。源氏は六条院に春の殿に正妻紫の上、後にはその上に女三の宮、夏の殿に花散里、冬の殿に明石の君、二条の院の東の院に末摘花、空蟬、その他の愛人を「集へ」たのである。ところが源氏の場合、古代的独裁者源氏が、女性に対し性欲を満す物としての「女」を多くあつめる、集へる、という域にとどまりきれず、伊勢物語流の思はぬも思ふもけじめみせぬ心「色好み道」のサーヴィス精神、面倒みの精神が発展し、流れていて、源氏は愛人に対しアフタサーヴィスを怠らない反面、近代的自我の確立した恋愛をする女性を愛した。物欲としての「女」に終始出来なかつたところに不幸が生じた。即ち、——

つまり、人間として、手強い相手の女性——権齋院、空蟬——にも「恋愛」をした。許されぬ藤壺を終生愛しつづけた。その地上的存在紫の上を最も真実に愛したつもりであつた。従つて実はこの方に重点があつたが為の不幸であつた。源氏の中には物欲の対象としての「女」と人間としての恋の対象となる「女性」とが混在するのである。漁色の対象となる人々、真心を焼尽する恋の相手となる、憧れ

の人々、もとよりその双方に、両方の要素が多少づつ混有されていくわけである。古代的、物的に女の展示は誇らしげになされるのである。恰も善美をつくした調度、食物、樂器が誇示されるように。塗りの剝落しかけた椀器が蔑まれるように老年の色好源典侍は嘲笑される。夕顔的女性を求めて歩き廻る。女三の宮の話を、うっかり承知したのも、「美人かな」という程の軽い浮気心、漁色の心からであり、それが宿命的悲劇の動因となる所に意味があるのである。

(VI)

さて、女性の側からは、世の人のいう「幸人」は必ずしも「幸人」ではなかつた。⑥浮舟の母はしみじみと述懐している。幸人の死ぬ為に雨がそぼふるとまで世人にいわせた六条院の「幸人」紫上は、源氏の好色心のやむ一刻、一刻は、幸せであつたが、決して眞の幸福をえなかつた。それは永続せず、特に、源氏の好色も終るかと思つた晩年に、ふつてわいた女三宮降嫁事件は、女三宮を六条院の正室として迎え入れ、「対の御方」に墮ちなければならなくなつた紫の上にとって青天の霹靂であり、致命的絶望感を覚えしめた。事実、彼女は自己の容色の衰え、自己の出自を省み、女三宮への源氏の愛の傾斜を鋭くみとがめて、出家——夫としての源氏拒否、妻としての生の抛棄——を願ひ出、うら若くして死んでしまふ。

この不幸は実は女性側、紫の上の不幸のみではなかつた。源氏は紫の上の出家希望、打ちつづくその死に打ちのめされてしまふ。それに拍車をかけたのが、紫の上を苦惱させた女三宮の姦通事件である。源氏は希望を失い、出家し、まもなく死を迎える。恋愛の面

源氏も亦幸福を失ったのである。

源氏は俗物的幸福は一切を手に入れた。しかし恋の幸せは逃がしてしまった。薫も亦、第一のその身にそなえた美貌、富、良識、人格等々、人々に讃歎される徳性をもつのである。第二、三の世俗的出世は約束され、当帝の女婿となり、世人からは幸人とみられる。しかし、恋愛の上での幸福は遂にたしかに握りえなかつたままである。

ありとみて手にはとられずみれば又行方もしれずきえしかげら
ふ

と詠ずる。まこと不幸な生であった、それが傍目には、羨ましがられる幸福な人であったのだ、という設定を作者はしているのである。

さて、では二代目の夕霧は如何。母を亡くして寂しい少年時代、刻苦勉励の日々、苦しい初恋。しかし初恋の人と結婚し、官位昇進めざましく、しかも愛人をもつくり子沢山である。太政大臣となる事は予想され、六条院の主人であり、『有能着実な官僚』である。今は全く憂のない人物である。だが、幸福な生といえるであろうか。初代光源氏、二代夕霧、三代薫、誰の生が幸せであろうか。詞をかえて言えば、誰の生が一番魅力があり、「人間として生きた」という実感があるであろうか。作者は読者に問を与えている。